
ミミズのゆくえ

「せんせいミミズとりについてきます」夏前から続くほとんど毎日のこと。幼稚園のミミズたちもここに住みついたのが運のつき。毎日胆を冷やしているに違いない。

ふとぬけたオオバコの根元の土の中からミミズが出てくる。爪の中を真黒にして穴を掘る。動くものを見つけた喜びか、皆の気味悪がるものを持てるという英雄的喜びか、それぞれに違った思いで触れているのであろうけれど。

こんなにすばらしいおみやげは二つとないという顔をして、何十匹と袋に入れ、子どもは意気揚々と帰るのである。その努力の結晶を、家庭ではどう処理するのであるか。ある母親の報告を御紹介する。

* * * * *
子どもが「おみやげ」として、幼稚園か

らミミズをビニール袋に入れて持ち帰って来ましたが、最初はびっくりさせられませんでした。というのは、幼稚園に入る以前は、家の中で子どものそばに小さな虫が飛んで来ただけでも「こわい」と言ってしまうのをかいていたものです。ミミズは、家の周囲にも土を掘ればおりますが、その頃は確か、ミミズのニョロニョロ動く姿を見て恐ろしいのか気味が悪いのか、妙な顔をして後ずさりしていたように覚えています。

ところが最近では、「先生にリボンをつけてもらったんだからお父さんに見せるんだ」と言っていて、ビニール袋に入れたミミズを玄関に置いておきます。私たちは、やはり何となく気味が悪いものですから「外へ捨てなさい」とか、あるいはまた、ごまかそうとして「かわいそうだから逃がしてあげなさい」と言ってみたりするわけですが、がんとして捨てようとしません。それ

どころか、近所の友だちにも「幼稚園でつ

かまえたミミズだよ」と言っていて袋から出し、手でつまんで得意げに披露しています。それで、いいかげん干枯びて死にかけると逃がすのは（私たちの気持ちとしては捨てるんですが）、いつも父親の役目です。

夏休み中、北海道の祖母のもとへ行っていたときも、太いを見つけて「おばあちゃんミミズだよ。幼稚園にもいっぱいいるんだよ」と、指でつまんで得意になって見せていたようですし、また、ミミズに限らず、つい先日などはナメクジを手にかけて「お母さんナメクジってどうしてベタベタするんだらうね」などと不思議がっていました。

このように、以前では考えられないほど子どもがたくましく成長？したわけですが、私たちとしましては、ミミズが、もう少し可愛げのあるものにならないだろうか、無理な望みを持っておりませう。

(河井祥子)